

博物館 Dictionary No.233

～あなたに語る・時代を超えて生きる心～

てんじ 展示中の作品について、研究員がわかりやすく解説します。 かいせつ

てんじ いずみあなしじんじゃ しんぞう
修理完成記念特集展示「泉穴師神社の神像」

神さまのすがた



じょしんぞう たくはた ち ちひめのみことぎざう
重要文化財 女神像（栲幡千々姫命坐像）
平安時代（12世紀） 大阪・泉穴師神社
とうぞう ふくぞう
唐装（中国風の服装）



だんしんぞう あめのおし ほみのみことぎざう
重要文化財 男神像（天忍穗耳命坐像）
平安時代（12世紀） 大阪・泉穴師神社
そくたい きぞく ふくぞう
束帯（平安時代の貴族の服装）

お正月といえば神社に初詣はつもうでですね。神さまに新年のごあいさつをして、おみくじを引いて…という人は多いのではないのでしょうか。ふだんでも、何かほしいものがあるときや、病気を早く治してほしいときなど、神社では神さまに、お寺では仏さまほとけに願いごとをしますし、神さまも仏さまも、とても身近な存在です。お寺には仏像がたくさん並んでいるので「仏さまのすがた」は何となくイメージできても、「神さまのすがた」はどうでしょう？

そもそも、日本の神さまは大きな岩や木、山などの自然のものやどに宿り、目に見えない存在そんざいでした。鏡や剣などを「よりしろ」とすることもあります。日本には八百万の神かみといっやよろずてたくさんの神さまがいて、森羅万象しんらばんしやうすべてのものに神やどが宿るといふ考え方があります。

ところが、日本に仏教が伝わると、仏像の影響を受けて目に見えないはずの神さまの像、「神像」がつくられるようになるのです。日本に仏教が正式に伝わったのは6世紀（1500年ほど前）ですが、それからじわじわと神と仏は近づきあって、奈良時代（1300年前）になると、とうとう神さまが仏さまの教えにしたがうようになります。

神社のなかに、神のためのお寺がつくられるようになりました。

これを「神宮寺」といいます。現在では神社とお寺はわかれています。江戸時代以前は神と仏は一体となっていて、少し前まで（江戸時代以前）は神と仏は一体となっていて、信仰されていました。それを「神仏習合」といいます。

今回、展示している神像は、大阪にある泉穴師神社の神像です。

泉穴師神社には全部で83体もの神像が残っています。ほとんどが

平安時代から鎌倉時代につくられました。人目につかない閉ざされたところに祀られていたためか、つくられた当時の色が鮮やかに残っているものが多くあります。金色の文様は、金箔を細く切って貼り付ける「截金」という方法で描いています。気が

遠くなるような細かな作業ですね。

神像のなかには、男神像と女神像をセットでつくるものがあります。きっと夫婦の神さまなのでしょう。男神は「束帯」という、平安時代の貴族の服装をしています。女神は髪をゆって中国風の服装を着る姿か、髪を垂らして日本風の衣を着ける姿にわかれます。よくみると、女性は髪型も服装のデザインもそれぞれちがっていて、とてもおしゃれです。神像をぜひ横から見てみてください。とても薄くてびっくりしませんか？倒れるのではないかと心配になりますよね。私も展示するとき、とても心配になるのです。神像は人間と同じ姿勢をしています。人間とちがってほとんど膝をつくりません。それはなぜでしょうか？

ひとつの説では、神は木にやどるから、木から神さまの姿があらわれることを表現しているためといわれています。たしかに、顔にくらべて体はあまり彫られていませんし、木の柱のようです。神さまを一柱、二柱、と数えますが、何か関係があるのかもしれませんがね。



重要文化財 女神像
大阪・泉穴師神社
平安時代（12世紀）
和装（日本風の服装）



重要文化財
男神像（天忍穗耳命坐像）
側面から見たところ

（美術室 竹下繭子）